

奄美フェスティバル 2013

出演：武下和平(唄・三線) / 朝崎郁恵(唄) / 前山真吾(唄・三線) / 里歩寿(唄・三線)

五月十二日(日) 開場16時30分 / 開演17時

世田谷パブリックシアター 三軒茶屋駅 東急田園都市線下東徒歩3分 / 東急世田谷線下東徒歩1分
世田谷区太子堂4の1の1 キヤロットタワー3階

提携：公益財団法人せたがや文化財団 / 世田谷パブリックシアター 後援：世田谷区

前売5,500円 / 当日6,000円(全席指定・税込) ※車椅子スペースは定員制・要予約お申込みは世田谷パブリックシアターチケットセンター03-5432-1515
※託児サービスは定員制・要予約二千円お申込みは03-5432-1526(ご利用希望日の3日前の正午まで)

【プレイガイド】

チケットぴあ……………☎0570-02-9999
(Pコード:193-220)
ローソンチケット……………☎0570-084-003
(Lコード:79551)
イープラス……………http://eplus.jp/
世田谷パブリックシアターチケットセンター
……………☎03-5432-1515



「アダンの海辺」田中一村画(個人蔵・千葉市美術館寄託) ©2013 Hiroshi Niiyama

お問合せ先：M&Iカンパニー ☎03-5453-8899 www.mandicompany.co.jp/

「百年に一人の唄者」と称賛される武下和平、
 「千年の昔に届く歌声」と評される朝崎郁恵。
 奄美を代表する二人の唄者に加え、
 次代を担う若き実力者・前山真吾、里歩寿が顔を揃える。
 現在、考える最高の唄者4名による夢の共演!!

豊かな海の恵みと、世界的にも貴重な動植物が息づく奄美群島。これらの島々では万葉時代に通じる古い言語が日常的に多く使われていることでも知られています。その貴重な言語が、もっとも美しい形で伝承されているのがシマ唄です。神唄、恋唄、物語唄、仕事唄…。奄美の人々は日々の暮らしの中で様々なシマ唄を歌い交し、シマ(集落)で生きることの意味や自然の恵み、ときには自然への畏怖を感じながら生活してきました。シマ唄は「奄美」という重層的な文化を伝えることができる、あるいは感じることができるもっとも直截な表現でした。また真声を多用する独特の節まわし、陰影に富んだ旋律も日本の民謡の中で異彩を放っています。

こうした唄の力は、シマ唄がシマ(集落)=コミュニティと密接な関係にあることで発揮されています。まさに大樹も根があればこそ。そうした奄美人の草の根的な力は歴史を紐といても数多く見出すことができます。折しも、今年は奄美群島が本土復帰を果たして60年目。戦後、アメリカの軍政府下に置かれた奄美で「世紀の民族闘争」とまでいわれた猛烈な本土復帰運動が起こり、署名運動が全住民の99.8パーセントという数字を獲得したのもコミュニティの力があってこそ。また、このたび文化庁が奄美の島々をユネスコの世界自然遺産への登録に推薦したのも、豊かな自然に敬意を払うシマの人々の暮らしがあってのこと。シマ唄は、そうした奄美人の心の支柱として歌い継がれている大切な文化でもあります。

文・森田純一



【武下和平(たけした かずひら)】 - 百年に一人の唄者

奄美大島南部で歌われる東節(ひぎやぶし)の世界において、考えられる限り最高の歌・三線を生み出したことにより、武下和平は“永久に”そう呼ばれる。1931年、加計呂麻島の諸数(しよかず)生まれ。小学生の頃からシマ唄が大好きで、唄者だった父親や従兄叔父に当たる福島幸義氏からシマ唄や詩吟の師事を受けた。青年時代には働きながら各集落に伝わるシマ唄を研究・習得し、東節の特徴と長所を巧みに組み合わせたスタイル“和平節”を確立。持ち前の力強い美声と優れた三線のワザをもって一世を風靡した。1960年代からは全国レベルの舞台に立って活躍、奄美シマ唄にとって初めての流派となる「奄美民謡武下流」を打ち立てた。奄美大島北部で歌われる笠利節を除けば、武下和平の歌と三線はほとんどすべてのシマ唄愛好者に今でも強い影響を与え続けている。代表作に「武下和平傑作集」「立神」「東節」などがある。

【朝崎郁恵(あさざき いくえ)】 - 千年の昔に届く歌声

1997年にリリースされた高橋全のピアノとのコラボレーション作品「海美(あまみ)」によって、その魂の歌声はシマ唄という伝統から解放された。それはシマ唄が本来的に持つ自由性を獲得した瞬間でもあった。1935年、加計呂麻島の花宮(けども)生まれ。シマ唄の研究に熱心だった父親の影響を受けて十代の頃から唄者として活躍、師と仰ぐ福島幸義氏とコンビを組んで1956年に地元セントラル楽器から「福島幸義・朝崎郁恵傑作集」を発表する。その後、上京して奄美のコミュニティなどで歌い続け、1983年にはCBSソニーから「朝崎郁恵傑作集」を発表。翌年から国立劇場において10年連続で公演を行うなど精力的な活動を続けた。彼女にとって最大の転機となった「海美」リリース後はUA、坂本龍一、ゴンチチ、上妻宏光、シタール奏者のヨシダダイキチなどジャンルを超えた様々なアーティストと積極的に交わり、奄美シマ唄の可能性を追求している。



【前山真吾(まえやま しんご)】 - 衝撃は前触れもなくやってきた!

1983年、奄美市名瀬生まれ。シマ唄なんてどこかで聞いているはずなのにそのときは違っていた19歳の前山真吾。町中で偶然耳に入ってきたシマ唄。その瞬間、雷に打たれたような衝撃が走った。高校の頃から弾いていたギターをその日から三線に持ち替えてシマ唄の世界に飛び込む。才能はすぐに開花した。師と仰ぐ奄美大島南部宇検村の女性唄者・石原久子譲りの骨太で押し上げるような歌三線で一躍注目を浴びた。歌詞の研究やフィールドワークにも熱心で、若くして多くの情報を獲得している。とりわけシマ唄の原点である「歌遊び」を同世代の若い歌手たちと繰り広げて、奄美のシマ唄に本来の価値を見出そうとするなど貢献度は高く、若手のリーダー格としてシーンを牽引している。2011年に開催された奄美民謡大賞では「俊金節」を歌って最高賞の大賞を受賞した。

【里歩寿(さと ありす)】 - シマ唄の神霊が宿る若き女性唄者

1993年、奄美大島瀬戸内町の古仁屋生まれ。兄である里朋樹がシマ唄を歌っていたこともあり、妹の歩寿も4歳のときからシマ唄を歌い始め、奄美で開催される「奄美民謡大賞」大会に7歳の時より出場して地元の人々から温かい声援を受けていた。そんな彼女の歌があるときから大きく変わった。中学生の頃だったか、節まわしに生命力みなぎる深い流れが生まれ、それが聴き手の心をとらえて離さないばかりか、聴き手の心の奥深くまで鋭く入り込んで、触ってはいけないところまで押し開けようとする。客席からどよめきが起こり、誰もが鳥肌を立てた。シマ唄の神霊が降りてきたという人もいた。この時から里歩寿に対する評価は一気に高まった。2010年の奄美民謡大賞では「嘉徳なべ加那節」を歌い17歳の若さで最高賞を受賞、1996年に元ちとせが記録した大賞の最年少記録を塗り替え、シマ唄シーンの頂点に躍り出た。

